

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBLなどが話題に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号も前号に続き、マッキントッシュの初期モデルを紹介していこう。



本文/田中伊佐資
製品解説/岡田金司(アトリエJe-tee代表)
撮影/小林幹彦(彩虹舎)

■ 24冊 Mcintosh Lab. / Western Electric co.

前回ご紹介した ハンマートン塗装のパワーアンプ 50W2 から今回ご紹介する MI-60、MI-75、MI-200までが Western / McIntosh アンプ と呼ばれ、他の McIntosh アンプとグレードが異なります。Western Electric co.は1930年代より最先端の技術力により、アメリカ西海岸で業務用アンプを開発。同社は1950年代頃からアメリカ全域そして世界各国に高品位アンプを供給して行くことになり、McIntosh など高性能なアンプを生産できるアンプメーカーがそれらを Western Electric のOEMで生産していた。



MI-60

1954年頃に開発されたプロ用ラックマウントモデルでハンマートン塗装になっている。こちらは当時録音スタジオや音楽ホールなどに配備されていた。その後、コンシューマータイプのMC-60が開発され、デザインも一新され、一般ユーザー用に販売される。両者ともに搭載されている真空管は 6550X2、5U4G X2、12AX7、12AU7、12BH7と同じ構成となるが、トランスのグレードやシャーシの設計がかなり違っている。ちょっとドンシャリ気味のMC-60のサウンドと比べると、こちらのMI-60はより高域が滑らかで中低域が分厚く明快なサウンドでなっていて、まさにWestern Electricのサウンドを引き継いだアンプとなっている。

MI-60の正面パネル。中央に電源スイッチと出力ボリューム、ヒューズホルダーがマウントされている



真空管側の写真。ウエスタンタイプの角形トランスの間に真空管がレイアウトされていて600Ω用のインプットトランス用、ライトランス用のソケットが用意されている



Mcintosh MI-60の型番と製造工場の住所が記載されている

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Mcintosh Lab. / Western Electric co.

黒くないマッキントッシュが再び登場 年代違いの2モデルを聴き比べる

黒光りするマッキントッシュもいろいろ、ハンマートン塗装のマッキン、これもまた音も含めてよろしいなあと思ったのが前号。

さて今回もまた黒くないのが出てきた。しかも2セットもある。パワーアンプのMI-60とMI-75。

見60は1950年代初期から中期のその後を引き継いだ第75は60年代の頭まで作られたらしい。ともに風貌はいかにも業務用らしく、見事に素っ気ない。しかし佇まいに、ヴィンテージ製品によく見受けられる感じのない威圧感がある。本気を出すところ、こゝろにかいてある。さっそくコレクトレーンの「ブラード」をRCAの業務用プレーヤーの載せて聴き比べを始める。スピーカーはジェンセンのインベリアだ。

まず60で鳴らしたとき「ああ、もうこれで決まった」と開始早々で、なんかもうぜんぶが終わったような感じがした。プフォーと飛び出たサクサクが、丸みを帯びた厚みがある。結構なアメリカン・サウンドだった。

ほとんどで切り上げて、すぐに75をつなぎ、同じ曲を聴く。基本のトーンは同種だが、こちらは輪郭がクッキリして前に向かって切り込んでくる。低音もよく沈み分解能も高い。より新しい音になった……と言いたいが、これだつて半世紀以上前の製品だから、新しいというよりモダンになったというべきだろう。

60は設計者の個性が出たコンシューマー的だったのに対し、75はより原音に忠実な再生を目指し、業務用として精度を上げたように感じた。だからメーカーとしての歩みはこれで正しい。ところがどっこい、今これをどこかのスタジオで使おうという話ではないのだ。音楽を鑑賞するにはどっちがいいか、である。

レコードはがらりと変わり、オーディオ指揮イングリッシュ・パロック・ソロイスツラによるパーセルの歌劇「インドの女王」。60は弦に張りがある、気持ちよく浸れる。75は弦の重なりがよく見えて生っぽい。どっちも捨てがたい魅力がある。

判断に困ったときは「声」に限る。ローラ・ニーロのR&Bの名曲のカヴァー集「ゴナ・テイク・ア・ミラクル」をかける。60は声がかくよか時代の際開気がよく出る。75は、そのふくよかさは余分なふくらみですと指摘するかのよう、カラッとよく抜けている。歌そのものが泣けてくる60を買ったとしても、オーディオ好きが音質を頭をもたげてきて、75に近づこうとする努力が始まる予感がある。だったら75を最初から買えばいいが、60のちよつとした味わいは75にはない。

さて、結局ですね、私は買えるだけの資金をまったく持ち合わせていないのですが、なぜか妄想してしまっただけです。どっちも素晴らしいので。



MI-75のフロントパネル。左側に電源スイッチと出力ボリューム、ヒューズホルダーがマウントされている



真空管側の写真。トランスのカー形状と真空管レイアウトはMC-75タイプと同じ、スピーカー端子、入力用端子もこちら側にレイアウトされている



Mcintosh MI-75の型番と製造工場の住所が記載されている